

第4回新潟GHP研究会

日時 平成14年2月23日(土)
午後2時45分～
場所 新潟大学医学部
有壬記念館

I. 一般演題

1 新潟県における自殺と遺書の法医学的検討

伊沢 寛志・出羽 厚二・福田 祐明
内藤笑美子・山内 春夫
新潟大学大学院医歯学総合研究科
法医学分野

【目的】新潟県は、警察庁の自殺統計で、10万人当たりの死亡率が常に高い状況にある。山内は吉岡の研究「日本人の自殺の実態把握と予防医学へのアプローチ」に参加し、自殺の背景を明確にすることが、自殺の防止対策の重要な基礎資料になるとしている。一方、遺書の有無は検死の際の重要なポイントであるが、単に自他殺の別の判断材料として処理されるだけのことが多い。そこで、本研究では自殺の背景を窺い知る一助として、1999年の新潟県における868例の自殺例と297例で残された遺書について検討を行った。

【資料と方法】1999年に新潟県で警察が行った検死2,469例のうち、自殺は868例であった。このうち297例で遺書が残されており、その割合(遺書率)は34.2%であった。本研究では、警察が遺書と判断したものすべてを遺書として検討した。検死報告などをもとに、自殺の手段・動機、遺書の有無・内容等、必要な項目について情報を収集した。遺書を数える際には、1枚の紙に書かれたものはすべて1通とした。2枚以上の場合で、宛先、署名、日付などの形式や内容から判断して独立している場合には各々1通づつとした。また、文章が連続していると判断した場合には複数枚の1通とした。尚、本研究では終始個人のプライバシーを十分考慮し、遺書内容の匿名性には特に配

慮した。

【結果と考察】

自殺手段別に遺書率をみると、入水は19.1%と低く、排ガスは50.0%と高かった。

自殺動機別に遺書率をみると、負債は49.5%と高く、その他精神障害とされた例では23.1%と低かった。自殺未遂歴を有していたものは113例あり、自殺言動を認めた例が286例あった。それぞれの遺書率は23.0%、25.5%と低かった。

遺書の内容を分析するために、キーワードとなる言葉を14に分類し、これらのキーワードを全ての遺書から検索した。キーワードは「謝罪」「感謝」「幸福感」「恨み」「別離」「死にます」「病気」「借金、金銭」「自己否定」「気配り」「死後の依頼」「死亡経過」「自殺場所」「自殺時刻」であった。「謝罪」の言葉は133例186通と最も多くみられ、その内容には、死ぬこと、自殺直後にかかる迷惑、先行不幸などの将来に対する謝罪のほか、病気や借金などで生前にかけた迷惑に対する謝罪もあった。「お世話になりました。すみません。」のように、「謝罪」の言葉と「感謝」の言葉がつながっていたり、「病気」、「死にます」、「自己否定」等の言葉との組み合わせもあった。

本研究のキーワード分類には、誰もが容易に内容を分類することができる利点があり、キーワードの組み合わせを通じて、自殺の背景を知ることができるように考えた。

2 精神科救急における薬物療法について：第14回日本総合病院精神医学会総会ケースディスカッションでのアンケート結果より

布川 綾子・小泉暢大栄・天金 秀樹
塩入 俊樹*・染矢 俊幸*

新潟大学医学部附属病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

精神科救急に関する報告の大部分は、精神科救急医療のシステムや夜間救急体制、あるいは精神科急性期治療病棟などについてで、その焦点は、それらの現状や問題点に集約されている。しかし